

## 詩編7編の黙想：義しく裁く神（2020年4月27日分 TM）

今日も呼吸を整えて、主の前に、与えられた一日を始めましょう。詩編7編に目を通してください。声に出し、朗読することも良いと思います。祈りの時、どうしても眠くなったりしますが、讚美歌を歌うことと祈りと聖書朗読を組み合わせることも工夫です。

この詩編を読んで、心に響くことは、「敵」（4、6、7節）、「追い迫る者」（2節）、「（神に）逆らう者」（10節）、「（神に）立ち帰らない者」が頻りに登場することです。あなたは周囲が敵だらけであると感じていますか？あるいは、物事を余り敵・味方で考えないでしょうか？前者であれば、「わたしの神、あなたを避けどころとします」（2節）。「神はわたしの盾」（11節）を心に描き、強大な敵に攻め囲まれても「避けどころ」に匿われ、剣や矢が飛んできて「盾」が護って下さることを確信しましょう。鋭敏で感受性が豊かなのは、少し大変ですが、あなたの素晴らしい特性かも知れません。あなたが、後者であれば、信仰の証、愛と義への飢え渴きが不十分で、本当の敵が見えていないだけなのかも知れません。それもまた、あなたの個性です。余り神経が細かい人と共にいると疲れてしまうこともあります。その気配りがずれていることもしばしばですから。（いつもこう言われています。笑い）

しかし、詩人は敵を見たり、自分を見過ぎたりすることから目を主なる神に向けます。神の裁きに期待するというのです。原文は「神は義なる裁き手」（12節）という3語で簡潔です。詩編3、4、5、6編は自分の罪を自覚し、それゆえ、神の憐れみ、赦しを請うていますが、この詩では、自分の潔白を信じ、7節で「裁き（mispat 義と憐れみに満ち「公正」の謂）を命じてください」と言い、9節では「諸国の民を裁いて下さい（統治する、裁く、弁護する、罰する）」「主よ、裁きを行って宣言して下さい」と懇願し、12節では、「正しく裁く神」と呼びかけています。新約聖書の神は愛の神、ヘブライ語聖書の神は裁きの神というのではなく、新旧約の神は、愛と正義をもって裁き、弁護し、救い出して下さる神です。この世の相対的な善悪ではなく、一方的な判断ではなく、神の義と憐れみによって裁きを受けることこそ信仰者の希望です。この世には、公平と慈愛をもって裁くものがないからです。詩人は神を、自分を支えてくれる「わたしの」神として「主に」呼びかけ、この方に信頼し、彼・彼女を攻撃し、訴える者らから護る「避けどころ」（2節）、「盾」（11節）であると告白します。

主なる神は立ち上がり、憤りをもって身を起こし、奮い立って裁きをなすお方です。主は、行動する神です。単に個人問ばかりか、諸国の民の前での正しい裁きです。ここで要注意です。詩人はここで自分があたかも神の「代理人」であるかのように戦争をしかけてはおらず、神に身を委ねているのです。敵を本当にないものであるかのように単なる心の問題、「精神化」するのでもなく、他方、神を背負って神の「代理人」であるかのように振る舞う両極端から自由になりたいものです。イライラは神が私を背負って下さっているというより、自分が神を背負っている場合が多いものです。裁き主である主に委ねましょう（参照ローマ12:19）。愉快なことに、神の裁きは直接罪びとに臨むというより、「自滅の道」に導くというのです。主に逆らう者を「災いに遭わせて」滅ぼし（10節）、自ら掘った「落とし穴」に自分で落ち込み、投げた石が自分の頭に落ちてくるように「災いが頭上に帰り、不法な業が自分の頭にふりかかる」（16-17節）と言います。主なる神は「正しくいます」方、「いと高き」神であり、このお方に感謝し、「ほめ歌うこと」（18節）こそ、信仰者の生きる道です。